
命ある全てのもの達へ

但野 尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命ある全てのもの達へ

【Nコード】

N5559Z

【作者名】

但野 尚

【あらすじ】

異世界へ「勇者」として召還された大量のアジア人種。「世界を破滅から救うため」という大義名分のもとに行われた召還は本当に正義だったのか？

多分チート無し、コメディ無し、シリアスというよりひたすら暗い話しになりそうな気配。

プロローグ（前書き）

異世界へ「勇者」として召還された大量のアジア人種。「世界を破滅から救うため」という大義名分のもとに行われた召還は本当に正義だったのか？

多分チート無し、コメディ無し、シリアスというよりひたすら暗い話しになりそうな気配。

初の投稿しかも遅筆で理系という三重苦。

プロローグ

「そのとき」に関する記憶は酷く曖昧だ。

特に「そのとき」の直前まで自分がどこで何をしていたか、ほとんど思い出すことができない。

「そのとき」、一瞬にして世界は崩壊した。

何の前触れもなく大地が鳴動し、人も建物もカクテルシェーカーの中の氷のように振り散らかされた。

そして……信じられないほど大量の海水が、圧倒的な破壊力を持って全てを押し流す。

息も出来ず、洗濯機の中の古タオルよろしくもみくちゃにされて、上下左右の区別もつかないまま途切れる意識……

次の記憶は揺れる船の上。

ぴしゃぴしゃと頬を叩かれ重いまぶたをあげると、突然、目の前に突き出される異国人の顔。

「……………!!」

解らない言語で何か叫んでいる異国人の、それでも表情はぱっと明るくなる。

やや遅れて、似たような容貌の異国人がわらわらと集まってきて、顔を拭かれ、温かいものに全身を包まれる。

そっと上半身が持ち上げられ、温かい飲み物が差し付けられて、それに反射的に口をつけると、周りからホツとしたようなどよめきが

漏れた。

飲み物の器越しに暗くうねる海が見える。

波間に浮かぶ大量の瓦礫の中には燃えているものもあり、その明るさが照らし出す海面には、夥しい数の人間の肉体がそこかしこに漂っている。

異国人たちは手に手に長い棒を持ち、船の縁から暗い水面を探りながら、大声で叫び続ける。

時折、引き上げられる人間もあるが、やがて頭まで大きな布に包まれて、整然と甲板に並べられていく。

さして大きくない船の上は、そろそろそをな包みでいっぱいになりそうだ。

……どうやら、大規模な災害が起きていて、異国人たちはその対応に追われる救助隊であるらしい。

そう思い至ったのは、搜索を断念したのであろう船が陸地へ向けて転進した時だった。

それにしても、どこの国の救助隊だろうか。

聞こえてくる言葉は少なくとも英語ではない。

服装も、救助隊や軍隊というよりはむしろ宗教的な、あまり活動的とは言い難い裾長いものだ。

横でさかんに話し掛けてくる異国人が、ふと思いついたように荷物の中から輪のようなものを取り出して頭にのせてくる。

額にヒヤリと金属が触れたとたんに、それまで全く理解不能だった言語が日本語に変わる。

「ごめんなさい、気がつかなくて。不安だったでしょう？もう大丈夫ですよ」

頷いてみせると、異国人は安心したように笑った。

怪我はないかたずねられて首を横に振ると、与えられていた飲み物をもっと飲むよう勧められた。

気持ちが落ち着くからと言われた事や、その後の引きずり込まれるような眠気を考えると、どうやらあの飲み物には鎮静剤の類が入っていたのだろう。

その作用で多少の逆行性健忘が起きていたのかもしれない。

意識が遠のいていく最中、異国人たちの誰かのつぶやきが妙に耳に残った。

「……………今回は大量だったな……………」

災害の大きさに戸惑う救助隊員をつぶやきとして、その時はあまり気にならなかった一言。

しかし後に思い出した時、ふと内臓を鷲掴みにされたような気分にとらわれる。

あの言葉にはもっと別の解釈があるのかも知れないと。

動揺（前書き）

誤字脱字、用語の間違いなどありましたらご教示ください。

動揺

時系列がはっきりしている記憶は「避難所」から始まる。

遠くから聞こえてきた潮騒が次第にざわめきに変わり、やがて不特定多数の会話だと認識できるようになる頃。

深い海の底からゆらゆら浮かび上がるように、少しずつ、少しずつ意識が鮮明になる。

まぶたの向こうが明るくなり、それが木洩れ日のようにちらついている。

周囲でにわかには人の動きが増えたことが、背に響くかすかな振動から感じとれる。

名前を呼ばれたような気がしてまぶたを開いてみると、目の前には高い高い石造りの天井。

身体にかかる薄い毛布をはねのけておそろおそろ起き上がれば、病院の入院患者用ベッドのように飾り気のないシングルサイズのベッドの上だ。

「……………ここは、どこだ?……………」

見渡せば周りは体育館ばりに広い空間で、同じような病院ベッドが一面にびっしりと……………ざっと見て50床以上はある……………並べられ、そのひとつひとつに人間が寝かされていた。

中には起き上がっていたり、ベッドに腰掛けているものもあるが、全ての人間に共通するのは黒眼黒髪であることだ。

恐らくほとんどが日本人……………少なくともアジア系黄色人種の集団が、ほぼ全員貫頭衣のような簡素な服を着せられて、ベッドについてい

る。

そしてベッドの間の狭い空間を、純白のロープをまとった白色人種と思しき集団がせわしなく歩き回りながら、ベッド上の人間を覗き込んだり話し掛けたりしている。

野戦病院？

もしくは兵舎？

……まさか……強制収容所？

軽いめまいに片手で顔を覆うと、指先に金属が触れる。

手でなぞり、両手で確かめると、額のまわりに細い輪がはめられていた。

……あ……

ふと蘇る船上の記憶。

そうだった。

自分も保護対象……被災者とか傷病者と呼ばれるべき人間なんだ。ということとは、ここは避難所とか病院、多人数を収容するための大規模保護施設の類だろう。

船上では自分以外に生存者はいないのかと絶望的な気持ちでいたけれど、こうして見るとけっこう助かっていたんだなと胸を撫でおろしていたところに、白いロープの男達が大声で呼ばわりはじめる。

「まもなく召還の儀が始まります！動ける方は手荷物を持って、誘導に従って移動してください」

召還……って何だ？

聞き慣れない言葉に首を傾げながら枕元に置かれた布袋を覗くと、中に衣服や財布、携帯など身に着けていた物が入っている。

周囲の人間がもぞもぞと動き始める中、強張る身体を無理やり伸ばし、ベッドから抜け出して袋を背負った。

ロープの男達の誘導に従って歩くのは、皆、自分と似たような者ばかりだ。

ほとんどが十代後半からせいぜい三十代の男。

皆一様に疲れて、生気のない顔つきをしている。

被災直後ならばそれも仕方がないのだろうが、何とというか、それだけが原因とは思えない、不自然な活気の無さが気になった。

動揺（後書き）

2011年12月19日 投稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5559z/>

命ある全てのもの達へ

2011年12月19日00時50分発行